



# 貝原守一医学振興財団会報

第12号



foundation juridial person MEDICAL SCIENCE KAIBARA MORIKAZU PROMOTION FOUNDATION

目 次

- ・ 巻頭言 ..... P 1  
財団理事 橋場 邦武 (長崎大学名誉教授)
- ・ 平成19年度 研究助成金贈呈式記念写真 ..... P 2
- ・ 平成19年度 研究助成金贈呈式の挨拶 ..... P 3  
理事長 佐伯 清美
- ・ 研究助成金贈呈式を終えて ..... P 4  
佐伯 仁子 (専務理事)
- ・ 平成19年度 研究論文選考過程について ..... P 6  
選考委員・橋場 邦武 (理事 長崎大学名誉教授)
- ・ 研究論文選考にあたって ..... P 8  
「研究と文章力」  
選考委員・天児 和暢 (理事 九州大学名誉教授)  
「選考に際し」  
選考委員・小野 順子 (福岡大学医学部臨床検査医学教授)
- ・ 平成19年度助成金贈呈者一覧 ..... P10
- ・ 平成19年度助成受賞者の論文抄録 ..... P11  
大内田研宙氏 (九州大学大学院医学研究院)  
岩田 幸子氏 (久留米大学医学部)  
中村 徹氏 (久留米大学医学部)
- ・ 貝原守一賞受賞者 ..... P14  
副島 隆志氏 (九州大学大学院医学研究院)  
秦 天氏 (九州大学大学院医学研究院)
- ・ 宮崎一郎奨励賞受賞者 ..... P15  
荒牧綾希子氏 (九州大学大学院医学研究院)  
屠 麗萍氏 (九州大学大学院医学研究院)  
仇 斌氏 (九州大学大学院医学研究院)
- ・ 財団の19年度行事 ..... P16
- ・ 貝原守一遺稿より 「 Deng熱」 ..... P17



## 「大学の変革と研究の将来」

財団理事 長崎大学名誉教授 橋場邦武

医学部および付属病院の機構の大きな変革に伴って、医学部などにおける研究活動の将来に対して危惧の念も聴かれる。大学の独立法人化によって、大学の自由度が大きくなった反面、教育、研究のみならず、経営的責任までも大きくなる結果となった。これは従来の大学の組織および大学人にとっては未経験の状況であり、研究活動の在り方も問題に直面しつつある。

さらに、新臨床研修制度の導入によって、若い医師達の志向の変化も表面化して、学部卒業後に大学に留まる医師数が著しく減少し、教官層を含めて、日常的業務が増大して多忙となったために、研究活動に集中し難い状況ともなっている。また、若い医師は、医療実技の習得への興味が強く、大学などでの着実な研究への関心が薄らいでいるともいわれる。

このために、臨床部門のみならず、基礎医学部門においても、研究従事者の確保の困難のために、教室の活動が憂慮すべき状態に陥りつつある大学も少なくない。生物学に近い基礎医学的領域では、医学部以外出身のいわゆる Ph.D 研究者が既に米国においては以前より質量ともに多数を占めており、本邦においても次第にその傾向が一般化しつつあるが、研究者不足の解決にはほど遠く、また、学生教育の問題もある。このような種々の問題の中で、physician scientist、すなわち、医師である研究者の存在とその充実の重要性が認識されつつある。

変革に伴うこのような医学研究の混沌状態に対しては、その時々での評価と反省によって、種々の修正や調整が加えられた体制が形成されていくではあろうが、それを俟つのみではなく、諸事情がどうあろうとも、研究志向のある若い研究者がともかくその活動を続けることが、新しい方向を生み出す原動力として尊重され育成されなければならないであろうと思われる。

貝原財団は平成4年より今回まで、途中から本邦の経済事情悪化の影響を大きく受けつつも、70名を超える若い有望な研究者にその研究の助成を行ってきているが、医学教育や医療制度のこのような変革の時代にあっては、その意義も一層大きいと考えられる。我が国の医学研究の伝統が受け継がれ、困難を乗り越えて、より強く発展することを心から願うものである。



平成 20 年 2 月 23 日 (福岡ガーデンパレス)

平成 19 年度 貝原守一医学振興財団研究助成金贈呈式

## 平成 19 年度貝原守一医学振興財団研究助成金贈呈式の挨拶

理事長 佐伯清美



本日、平成 19 年度貝原守一医学振興財団の研究助成金贈呈式に、受賞者の皆様始め、財団理事及び役職の皆様、ご多用中をご出席下さいまして、洵に有難く篤くお礼申し上げます。

三名の受賞者の皆様おめでとうございます。心よりお喜び申し上げます。

本財団の研究助成金の贈呈は、平成 4 年に始まり本年度で贈呈者は 66 名の多数になりました。

この 66 名の方々の、医学の広い分野に亘る優れた研究は、日本の医学の発展に大きく寄与したことを信じております。

「研究助成金授与により医学の発展に寄与し、以って社会の福祉に貢献する」という設立目的を達成していることを喜び、また、誇りに思っているのでございます。

本日助成金を受けられる皆様も、助成金を研究に役立てていただき、優れた研究成果を挙げられるよう希望し念願いたす次第でございます。

国の厳しい金融政策の施行の中で、中断することなく研究助成金の贈呈ができておりますことは、担当理事の方々が縁の下の方になっていただき並々ならぬご尽力をいただいているお蔭でありまして、この席をお借りして篤くお礼申し上げます。どうか今後ともよろしくお願い申し上げます。

また、各大学より毎年秀れた研究論文の応募が多数続いてありますのは、当財団の論文選考が立派になされている事が理由の一つと思っております。

選考委員諸先生の厳正、公正な選考のお蔭でありまして心よりお礼申し上げます。

ここ数年財団の財源が乏しいために、助成金授与者の人数が少ないことを残念に思っております。一日も早く日本の経済が好転し金利が上がって、もっと多くの方に助成授与のできる日を待ち望んでいるのであります。

今後とも財団理事の皆様の一層のご協力をいただき、財団の発展に力を尽したく思っております。

受賞者の皆様に再度お喜びを申し上げ、大変簡単でございますが挨拶といたします。

## 研究助成贈呈式を終えて

専務理事 佐伯仁子



当財団の事業で最も重要な柱と位置づけている、研究助成金贈呈式は平成 20 年 2 月 23 日(土)福岡市中央区のガーデンパレスに於いて開催されました。

この贈呈式に至るまでの経過は、前年の 6 月下旬から県下の各医学系大学に研究論文募集の案内に始まり、9 月に論文応募を締め切り、明けて 1 月中旬に論文審査委員会を開催し、審査委員の先生方による慎重な審査を経て優秀な研究者を選考し、助成金を贈呈するという長丁場で年間の約 3 分の 2 の期間を費やし、その間、論文を審査いただく審査担当の先生、また、厳しい経済事情の中で財団の運営にご尽力いただいている財務担当役員の方々のご苦勞が結実し、晴れの式典を迎えるこの日は特別な思いがございます。

式典の冒頭、佐伯理事長の挨拶では、現在まで延べ 66 名の方々に助成金を贈呈してきたが、過去の受賞者の方々は各分野でそれぞれご活躍されており、喜ばしい限りであり、これも厳しい社会環境の中、財団の運営にご尽力をいただいた理事の皆様のお陰であると謝辞を述べられました。

今年は審査の結果、女性を含む 3 名の研究者が助成対象に選考され、それぞれ理事長から賞状と助成金が手渡されました。選考経過の講評は審査委員長を務められた当財団理事で長崎大学名誉教授橋場邦武先生が選考に至る経緯を詳しくご説明なされました。

その後、同じく選考委員の理事九州大学名誉教授天児和暢先生、福岡大学医学部教授小野順子先生が論文選考のご感想を述べられ式典を終えました。

第 2 部の祝賀会は結城操理事が我が国は技術立国であり、この分野では世界に誇るものがあり、本日受賞された皆様方の研究の成果が見事に実を結ぶことを祈念するとの挨拶の後、柳原弘毅理事の乾杯の発声で始まりました。

毎年、懇親会の途中で各受賞者による研究論文の内容について判り易い説明を手短にいただいておりますが、約 5~10 分程度の持ち時間が、出席した役員による質問で、それぞれ大幅に延長し質疑応答は充実した内容となりました。

選考委員の先生が応募論文を読むだけでなくこのように実際に話を聞くと、また、違った一面が判り本当に良かったと語られたことが非常に印象的でした。

受賞されました 3 名の方々の研究内容の発表を拝聴していると、若々しい研究者の皆様が、今後立派な研究成果を収められることを願うばかりです。

今年の受賞者のお一人に女性の小児科医、岩田幸子先生が選ばれましたが、ご自分の

体験も交えられ、主婦と育児、それに小児科医として研究に励んでおられるご様子をお話される表情は輝いて感じられ、巷間小児科医が不足していると云われていますが大いに心強く感じ、その姿勢に敬意の念を抱きました。

約 3 時間の式典と祝賀会は塚田武司理事の締めくくり挨拶で盛会裏に終わることができました。なお、式典の準備段階から当日の司会進行をしていただいた、結城慎也理事に心から感謝を申し上げます。



(贈呈式の祝賀会)

## 平成 19 年度研究助成選考過程について



選考委員・財団理事 長崎大学名誉教授 橋場邦武

平成 19 年度員原守一医学振興財団の研究助成には、九州大学 4 件、久留米大学 6 件、福岡大学 1 件の、合計 11 件の応募があった。今回は産業医科大学および大学以外の研究機関からの応募はなかった。最近では、研究方法が分子生物学的な方法、免疫学的方法、遺伝子学的方法などが共通して広く用いられるようになったこともあって、各教室間の研究分野の境界が重なることも多い。このため、応募者の研究分野を単純に分類することは困難であるが、腫瘍、炎症、に関連する研究課題が、消化器、呼吸器、婦人科、脳外科、などの分野からの応募のなかにあり、また、小児の脳神経障害、遺伝性皮膚疾患、心不全の脳内自律神経機序、に関する研究課題もあった。

平成 20 年 1 月 19 日に、天児和暢（九州大学名誉教授）、小野順子（福岡大学教授）、橋場邦武（長崎大学名誉教授）の 3 名の選考委員による選考委員会が開催された。佐伯清美財団理事長が同席され、その御指名によって、橋場が委員長として議事を進行した。

選考の方法は例年と同様であるが、合同の選考委員会に先立って、先ず第一段階として、3 名の選考委員が、それぞれ独立して、応募書類によって、応募者の研究課題、研究目的、研究方法、添付された論文別冊、などを検討した。また、これまでの研究歴、研究実績、発表論文については、その数とその内容、特に論文掲載雑誌の国際的な評価の高さなどを考慮し、これらの諸点を総合して応募研究の独創性、将来性、実現可能性などを評価した。

第二段階として、上記のように 1 月 19 日に開催した選考委員会において、3 委員が予め行った第一段階の評価を持ち寄って、それを公表しあった上で、1 課題ごとに意見を交換した。3 人の委員の第一段階の評価は必ずしも一致しない点もあったので、率直に意見を述べて検討した結果、最終的には 3 名の受賞者を一致して推薦することができた。

受賞者と決定したのは、別表にも掲載されているごとく、久留米大学中村徹氏、久留米大学岩田幸子氏、九州大学大内田研宙氏、の 3 氏であるが、いずれも上述の種々の観点より検討して、今後に有用な具体的研究成果を期待できるものと評価された。この委員会の決定は、佐伯理事長によってそのまま受理された。

3 名の受賞者について、選考委員会で特に評価された点を、筆者の若干の感想も加えて紹介すると、久留米大学消化器内科の中村徹氏は、いわゆる再生医療による非代償性肝硬変患者の治療を目的としたもので、倫理的問題や免疫上の問題の少ない自己末梢血



中の単核球を採取して、これを患者に経静脈的（あるいは、経肝動脈的）に肝への移植を行うものである。再生医療はいわゆる幹細胞の新規開発なども報告されて研究発展の著しい分野であるが、同氏はこれまでに動物実験を重ねてきた実績があり、競争の多いこの分野においても、実用化に向かって今後期待されるものと思われる。

久留米大学小児科の岩田幸子氏の課題は、新生児の低酸素虚血性脳症の治療に関する研究で、脳低温度療法の有効性が認められているものの、その実施に当たっては、高価な専門機器が必要で、かつ、周産期センターなどの高度の施設を必要とするために、その恩恵が一部の地域にのみ限定されていることを打開しようとする研究である。冷却方法の開発とミニ豚によるこれまでの多くの実験結果を基礎として、その臨床応用を実現しようとするものである。これにより、より一般的な医療機関、さらには、開発途上国における応用をも意図するもので、その医療社会学的な目的が評価された。本財団の研究助成としては、従来の課題に比べてやや異色ともいえる観点から期待されるものである。

九州大学先端医療医学講座の大内田研宙氏の課題は、膵癌幹細胞の同定とこれを特異的な標的とする新規膵癌治療法の開発を目的とするものである。膵癌のような固形癌における癌幹細胞の同定には、白血病などの場合とは異なる困難性があるが、同氏は癌マーカー、発癌性などに関する多くの研究発表があり、その実績などから、今後の研究の発展に期待できるところが大きいと評価された。同氏は、平成 17 年度の本財団研究助成を受けており、2 度目の受賞はやや例外的ではあるが、その一貫した研究業績から、本年度の受賞者として異議なく選出されたものである。

若い研究者への研究助成は本財団の最も重要な設立目的であり、将来性豊かな研究者を助成対象として選出できたことは、選考委員としてもまことに喜ばしいことである。3 名の受賞者の着実な研究成果に心から期待するものである。なお、今回の応募者の中には受賞者以外にも立派な研究者がおられたことを付記して、今回の財団研究助成に応募されたことに対して感謝したい。

なお、3 名の受賞者には、今回の研究課題に関係ある論文発表の際には、論文後記に本財団の助成を受けられたことを明記し、また、その論文別冊を財団本部に必ず送付されることをお願いしたい。これは、本財団の客観的な貴重な財産となるものであり、また、今後の活動の最も大きな原動力ともなるものであるから、是非とも実行して頂くようお願いする次第である。

以上をもって、平成 19 年度貝原守一医学振興財団の研究助成選考過程の御報告としたい。

## 「研究と文章力」

---



選考委員・財団理事 九州大学名誉教授 天児和暢

これまで色々な研究費の審査を担当してきた。審査は、申請書を読むことによってなされる。審査資料を読み適切な判断をすることが審査員の重要な仕事である。学会別に審査を担当する文部科学省の科学研究費と違い、貝原財団では医学全般が対象になっており、基礎・臨床を含めた広い範囲での研究を審査することとなる。

審査する資料は申請書とそれに添付されている論文である。なかでも、申請書の文章が重要な役割を担っている。研究者が審査員に自分の研究を説明する中核となる資料である。当然そこには、研究者が最も評価して欲しい事柄、その研究の持つ重要性、特徴などが書かれていなければならない。これまで数年に渡る審査に於いて、屢々難解な文章や、中心のぼやけた記載に遭遇してきた。そのため恐らく良い研究なのだろう、との気持ちがあるにもかかわらず高い評価を与えられなかったという経験がある。そこでこれまでの経験を踏まえ、申請される方々への一審査員の希望を書いてみることにする。

まずは研究のタイトル、内容を的確に表現し、一読して大凡の研究内容を把握できるような短い簡潔なのが望ましい。略語や英文はなるべく避けた方がよい。審査員は、まずこのタイトルを読み、それによって研究のおおよその見当を付けているのである。目的と方法は更に重要である。自分のやっている研究内容を文章にするとどうしても専門用語が多くなる。特に英語の略語は一般的に広く使われているもの以外は、乱用しない方がよい。医学もこれだけ多岐にわたり発展すると、専門を少し外れただけで、その用語の意味が理解困難になる。自分の研究内容を限られた字数で第三者に正確に伝えるには、かなり日本語の文章を練る必要がある。詳細で複雑な説明文は、よほど上手に、理路整然とした文にしないと、執筆者の考えているほどには、その内容が第三者に伝わり難くなる。内容を検討する方法の一つとして、一度書いた文章を数日置き、書いたときの細かな記憶が薄れた頃にもう一度読み返してみることである。おそらく自分で書いたにも拘わらず理解困難な文章に出会うはずである。あるいは同じ研究室の別の研究をしている方に読んで貰い、その意見を聞くのも大きな助けになるはずである。

質疑応答のある口頭での説明ではなく文章だけの申請では、文章力が、大きな力となるはずである、これはまた論文執筆においても役に立つことである。

## 「選考に際し」

---



選考委員・福岡大学医学部臨床検査医学教授 小野順子

今年度の応募もそれぞれ特徴のある内容で選考には苦慮しました。遺伝子レベルにおける病因解明、遺伝子導入や分化誘導による再生医療、シグナル伝達の解明とそれらをターゲットとした診断や治療戦略の開拓など、分野は異なっていましたが、何れも最先端の研究で、成果も期待されるものでした。

中でも受賞された膵癌幹細胞同定と幹細胞を標的とした治療法の開発は、発癌機構に対する新しい概念を、現在予後が非常に悪い膵癌治療に導入し、突破口となる可能性が期待されました。

脳低温療法に関する研究は、目的も研究手段もこれまで本財団に応募された他の申請とやや異なっており、評価が分かれるかと思われましたが、新鮮であり、また留学先で十分な基礎データを集積しておられて、今後の実用が期待される研究として対象となりました。女性研究者の授与は第1回の皆川先生に次いで二人目であることも同性として嬉しいものでした。非代償性肝硬変に対する自己末梢血単核細胞移植治療は、肝機能改善の機序について予想もしなかった方向へと進展するなど、今後の急速な展開が予測されて、臨床研究の面目躍如と感じられました。他の申請も優れた内容のご研究であり、ご応募いただき有難く思っています。引き続き発展されて是非再度の挑戦をお願いいたします。

## 平成 19 年度 研究助成金授与者

(敬称略)

授与者氏名	所属機関	対象研究テーマ
大内田 研宙 (オオウチダ ケンオキ)	九州大学大学院医学研究院 先端医療医学講座・特任助教	c-kit, CD44, CD133 を用いた膵癌幹細胞同定と癌幹細胞特異的シグナルを標的とした新規膵癌幹細胞標的治療の開発—難治癌である膵癌の根治を目指して—
岩田 幸子 (イワタ サチコ)	久留米大学医学部小児科・助教	途上国や蘇生現場で普及可能な次世代、脳低温冷却機器の開発
中村 徹 (ナカムラ トオル)	久留米大学医学部内科学講座消化器内科・助教	非代償性肝硬変患者に対する自己末梢血単核細胞を用いた再生医療



c-kit, CD44, CD133 を用いた膵癌幹細胞同定と癌幹細胞特異的シグナルを  
標的とした新規膵癌幹細胞標的治療の開発  
—難治癌である膵癌の根治を目指して—



九州大学大学院医学研究院 先端医療医学講座  
大内田研宙

膵癌は癌死の 5 位を占めながら現在でも 100 人中 3 人しか根治しない疾患であり、その治療法および診断法の開発は社会的要請度が高い。腫瘍性病変がヘテロな細胞集団であることは、当然認識されていながら、従来の癌研究は癌組織の中で大部分をしめる細胞の特性が、その組織全体の特性をあらわすものとしてすすめられてきた。しかし、こういった細胞を標的とした治療は効果が一時的で新たな治療抵抗性が出現し予後改善効果は乏しい。最近、癌組織中のある特定の細胞集団だけが腫瘍形成能をもち、腫瘍全体を維持する能力をもっているとする癌幹細胞の概念 (Nature, 2006, E Passegue) が提唱されている。この細胞集団は薬剤耐性遺伝子や薬剤排泄能を有しており、治療抵抗性で再発・再燃に深く関与している。そこで、癌幹細胞研究は、抗癌剤や放射線等の治療法に抵抗性をしめすメカニズムを説き明かすものと期待されている。

本研究の目的は、膵癌における癌幹細胞をその表面マーカーとして期待されている CD44, CD133, c-kit の 3 マーカーを用いて同定し、その特性を明らかにすることである。さらに、同定された癌幹細胞を標的として、c-kit シグナルを阻害する inhibitor を用いた膵癌の根治を目標とした新規膵癌幹細胞標的治療を開発する。

本研究においては具体的には下記の 4 つを研究期間内に明らかにする。

- CD44, CD133, c-kit を基盤とした多種の表面マーカーを用いて癌幹細胞を純化する手法を確立する。
- cell sorting により生きた癌幹細胞を選択的に純化し、移植実験で癌幹細胞としての能力を証明する。
- 発現・機能解析により、癌幹細胞の治療抵抗性や転移・浸潤メカニズムへの関与を検討する。
- 癌幹細胞を特異的に標的とするため c-kit シグナルを阻害する inhibitor を用いた治療法を開発する。

## 途上国や蘇生現場で普及可能な次世代、脳低温冷却機器の開発



久留米大学医学部小児科・高次脳疾患研究所

岩田 幸子

新生児の低酸素虚血性脳症は、約半数が死亡もしくは重篤な後遺障害につながるという重症疾患ながら、効果的な治療法がなく、その発症率・予後は長らく不変であった。脳低温療法は、近年複数の大規模臨床試験で有効性が立証された初めての治療法であり、それまで模索的医療を余儀なくされていた現場から熱烈に歓迎された。一方で、現在のプロトコルは専門高額機器・安定した電力供給・きめ細やかな温度調節を前提とするため、治療対象となるのは先進国の第3次施設に収容された児に限られている。さらに、同療法による脳保護効果を期待するには、出生後6時間以内に治療を開始する必要があり、治療対象児が実際に誕生する一次施設や遠隔地域で出生した多くの児が治療対象外となる可能性が高い。また、途上国における本症の発生率は先進国の数倍から数十倍であることを考えると、医療資源へのアクセスが限られた low resource setting において、高価なハイテク機材や多大な人的資源に依存せず、安全に導入可能な冷却方法の開発は世界的な急務課題であり、その実現により利益を甘受できる新生児数は飛躍的に増加すると期待される。

そこで我々は、熱バッファ材 (Phase Changing Material、以下 PCM) に着眼した。PCM は、固相—液相間の移行の際 (融解、凝固)、多量の熱を吸収 (融解熱)・放出 (凝固熱) するという性質から、既に輸送・建築業界等において幅広く使われている新素材である。なお、溶解温度は、用途に応じて、塩類の配合を変えることにより自由に設定することが可能である。

本研究では、冷却目標温度に溶解温度を設定した PCM を用いて、低酸素虚血負荷を加えた新生仔豚に全身低体温療法を行い、持続安定した冷却の可能性について検討する。

## 「非代償性肝硬変患者に対する自己末梢血単核球細胞を用いた再生医療」



久留米大学医学部内科学講座消化器内科部門

中村 徹

肝硬変症の進展に伴う肝不全による本邦での死者数は年間9千2百人にのぼる。さらに、B型・C型肝炎ウイルスに起因する肝硬変患者の多くは肝細胞癌を発症する。肝細胞癌による年間死亡者数は年々増加し、2002年には3万4千人となっており、肝硬変症に関連した年間死亡者数は4万人を超える計算になる。また、肝硬変患者の中には、最近マスコミなどで取り上げられているような医療行為によってC型肝炎ウイルスに感染した患者も多く含まれており、これらの患者に対して十分な対策を講じることは急務と考える。しかし、進行した肝硬変症に対する根本的な治療法は肝移植しかなく、その肝移植も慢性的なドナー不足に悩まされ一般的な治療法として普及していないのが現状である。

我々は最近の研究において、血管内皮前駆細胞（将来、あらゆる臓器の血管の内皮細胞になることを運命づけられた細胞）は、血管を形成するばかりでなく、様々な増殖因子、線維を溶かす線溶系酵素を産生することが分かった。その細胞を障害肝臓へ移植することにより、肝硬変・肝機能の改善と肝臓再生の促進、さらに死亡率を有意に低下させることが分かり、2007年米国消化器病学会雑誌に掲載した。今回ヒトへの臨床応用を目的とし、自己末梢血単核球細胞移植による非代償性肝硬変患者に対する肝臓再生を目指した臨床研究を開始した。単核球細胞には血管内皮前駆細胞が多く含まれている。本研究により、患者自身の末梢血から採取した単核球細胞を肝硬変患者に移植することで患者の予後が改善できれば、細胞移植で用いる細胞に関する倫理的問題はないため、極端なドナー不足や高額な医療費のため肝移植を受けることのできない患者を救済する治療法となることが期待され、社会的貢献度も大きいものと推測される。

本臨床研究は2006年9月より開始し、2007年12月までに3症例を経験した。現時点において有効性を評価するにはまだ十分ではないが、肝硬変症のため低下している血中総蛋白・アルブミン値の上昇、貯留した腹水量の減少、内服利尿剤の減量を可能にし、期待される治療効果が示されつつある。今後は症例数をさらに増やし、安全性および有効性を示したいと思うとともに、福岡県を含めた地域医療の質の向上に寄与することが出来ればと思っています。

## 平成 19 年度 貝原守一賞・宮崎一郎奨励賞 受賞者

青藍会 貝原守一賞（九州大学大学院医学研究院細菌学分野 同門会）については下記のごとく決定しました。

### 受賞者名

○副島隆志（社会人大学院生）

論文題名：

Photoactivated ethidium monoazide directly cleaves bacterial DNA and is applied to PCR for discrimination of live and dead bacteris.

掲載雑誌：

Microbiol Immuno1.51(8):763-775, 2007

内 容：

PCRで生菌と死菌を区別する方法を開発しました。

○秦 天（中国からの留学生、現在博士課程3年生。）

論文題名：

Complete nucleotide sequence of pLD-TEX-KL, a 66-kb plasmid of Legionella dumoffii TEX-KL strain.

掲載雑誌：

Plasmid 58(3):261-268, 2007

内 容：

レジオネラ属のプラスミドに解析をした。

青藍会 貝原守一賞について

（青藍会）は、九州大学医学研究院細菌学教室の故戸田忠雄名誉教授が設立され、故貝原守一先生もその一員で助教授として活躍されていた。

貝原守一先生が亡くなられた後、芳子夫人（財団・初代理事長）が、故人の遺志を次いで、平成3年に財団を設立され医学を志す若い研究者を助成する活動を始めた際、細菌学教室に青藍会貝原守一賞として平成4年に発足し現在に至っている。



宮崎一郎奨励賞（九州大学医学部寄生虫学教室に設置）については下記のごとく決定しました。

### 受賞者名

- 荒牧綾希子 九州大学大学院医学研究院 感染免疫・熱帯医学分野大学院生
- 屠麗萍 九州大学大学院医学研究院 感染免疫・熱帯医学分野大学院生
- 仇斌 九州大学大学院医学研究院 感染免疫・熱帯医学分野大学院生



### 宮崎一郎奨励賞について

宮崎一郎奨励賞は故宮崎一郎九州大学名誉教授（本財団理事）を記念して、平成6年11月に創設され、貝原財団から九州大学医学部寄生虫学講座同門会に寄付されており、この資金から授与される。

受賞の対象は同門会会員並びに福岡県内の寄生虫学・衛生動物学者及びこれに順ずるものとなっている。

## 財団の主な事業報告

### (1) 評議員会

開催年月日	開催場所	議案
第一回 平成19年6月23日	福岡ガーデンパレス	1、平成19年度事業計画並びに収支予算案の件 2、その他
第二回 平成20年2月23日	福岡ガーデンパレス	助成事業の概況説明

### (2) 理事会

開催年月日	開催場所	議案
第一回 平成19年6月23日	福岡ガーデンパレス	(1) 平成18年度事業報告の件 (2) 平成18年度収支報告承認の件 (監査報告) (3) 平成19年度事業計画案の件 (4) 平成19年度収支予算案の件 (5) その他
第二回 平成20年2月23日	福岡ガーデンパレス	今年度の助成事業概況について

### (3) 助成事業

年月日	行事
平成19年6月21日	平成19年度研究奨励金応募要領送付 産業医科大、九州大学医学部、福岡大学医学部、福岡歯科大学 久留米大学医学部、九州がんセンター、九州歯科大学
平成19年10月25日	貝原守一賞 青藍会・九州大学医学部細菌学教室同門会 賞金30万円を贈呈
平成19年10月25日	宮崎一郎奨励賞 九州大学医学部寄生虫学教室同門会 賞金20万円を贈呈
平成20年1月19日	助成金授与論文選考委員会 (於：福岡ガーデンパレス)
平成20年2月23日	平成19年度助成金授与式開催 (於：福岡ガーデンパレス) 授与者3名

### (4) 会報発行

年月日	行事
平成20年2月8日	貝原守一医学振興財団会報 (第11号) 発行



昭和17年 (1942) 31歳

デング熱 —天狗か Denguer か— (三)

貝原 守一

長崎流行の初發地である館内町は傾斜地であつて、坂になつた街路の兩側の下水で排水などもわりうまく行われ、これまでヒトスジシマカの發生はすくなかつたのだが、水利の悪いことを考へて、防火水槽の設備が非常によく整備され而もその排水がうまくいかなかつたために、ヒトスジシマカの發生をうながし、デング熱の傳染を非常にたすけることになつた。

蚊がデング熱ウイルスを傳搬することは一九〇三年すでにシリヤ地方でグラハムが認めてゐたが、それがネッタイシマカでなければいけないと云ふことは一九一六年クリランドやマクドナルドによつて確かめられた。ヒトスジシマカが同様に病原を傳搬することを始めて證明したのは小泉丹、山口謹爾氏等で一九一七年のことである。

蚊の體內のデング熱ウイルスは七五日間は充分傳染性をもつてゐることが知られてゐるが、條件さへよければ、蚊が生きてゐる間中その毒性を失わないと云はれてゐるから、九州などのやうに成蟲のまま年を越せばウイルスも年をこして、來年の傳染の源となり得る可能性は考へることができ。

蚊の體內ではこのやうに長い間傳染力をもつてゐるウイルスが、人間の體內では、感染した後發熱する前六時間か一八時間、發熱後せいぜい四日間位しか患者を刺した蚊に感染を引きおこさないことに興味がある。

患者の血液を吸つた後、八日から一四日位たつて蚊はや

つと人にデング熱ウイルスを移すことが出来るやうになる。これはウイルスがある程度増殖しなければならぬからだ。人がこのやうな蚊にさされると、大抵の場合四日から六日目頃に突然四十度近く、時にはそれ以上に熱がでて發病する。發疹を伴ふことがあり、關節が痛み頭痛や腰痛がひどいこともある。

しかし、臨牀的な病状はいろいろで、流行によつても違ふ。蚊にさされて二日位に發熱することもあれば、一五日もたつておこることもある。普通發熱の後二、三日たつと第二回の熱發作や、發疹があるが、これもさうばかりではない。

デング熱は死亡率ゼロと云つても良い位で、その経過も七日間がほとんど決まりのやうであり、病氣としては全くたちのいいものだが、流行しはじめると傳染性が大きく、短時日のうちに老若男女をとわず、多數の人を一時に襲ふから、社會的な活動や、團体的な行動を妨げると云ふ意味でこの豫防は重大な問題である。實用的な豫防接種法がない現在では、蚊の發生をふせぐとか、患者が出たら蚊帳の中に隔離するなどのほか策はない様で、この患者がつかつぎに何百人と出るような場合は、その傳染をくひ止めることはなかなか困難なことである。

(筆者・本學醫學部助教授)

九大新聞 昭和十七年十二月八日

三回にわたり連載した「デング熱」は今回で終了となります。

なお、昭和十七年当時發行の九大新聞からの転載にあたり漢字及びかなづかいは出来る限り原文に忠実に掲載しました。